

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

香月教授指導

一遍上人の名号観

四回生 浄土学研究室

西岡信孝

(一)

一遍智真は「一遍聖絵」「一遍上人縁起絵」に依れば  
延応元年豫州にて越智河野七郎通広の子として生誕し、

十歳悲母に死別し、十三歳鎮西に赴き、爾来十二年証空  
門下の聖達に仕え、文永十一年夏、熊野証誠殿に参籠し  
て、「六十萬人頌（「一遍上人語録」卷上）を得て以後  
十六年間、「すてゝこそ」（「語録」卷上五）の化益に  
身命を惜まなかつたのである。

彼の唱えた「独一の名号」（「語録」卷下 十六）の  
思想は、法然の専修念仏の流れをくみながら、これをそ  
のまま継承したのではなく、証空の西山義を基礎にし  
道元の禅思想の影響を受けると共に、神祇に接近し、独  
自の念仏思想となつたのである。

今、紙面の関係上、才一章「名号観の教理的背景」の  
中より、特に機法一体よりみたま名号観を述べて、一遍の  
名号観の一端としたい。

(二)

別願超世の名号（「語録」卷上）に於ける南無阿弥陀  
仏について、証空は弥陀の正覚自体に衆生往生の行体が  
具わつてゐるという正覚往生同時一体説をたて、南無ず  
る衆生は行体である阿弥陀仏に既に具わつてゐるという

意味の機法一体を説く。証空は「述誠」に

今此本願の名号には、五劫思惟の心内に南無の衆生をのせて願じ、兆載永劫の萬行は流転の我等どもの為に行じて仏の方よりぞ南無阿弥陀仏と一つに成じ、凡夫往生の仏とはなり給へり。

とのべて、弥陀の正覚の覚体の成就する所、そこには南無の衆生ありとする。この仏の方より南無阿弥陀仏になる事を更に「述誠」には、

・ 仏の方より衆生を追ありき給ひける上は云々。

とのべており、機の法より弥陀に南無するは、自力であり、弥陀が「衆生を追ありき給ひける」所が、証空の説く機法一体の趣旨である。

この証空の説を一遍は「語録」巻下十に、

念々不捨者といふは。南無阿弥陀仏の機法一體の功能なり。或人の義には機に付といひ。或は法に付ともいふ。いつれも偏見なり。云々。其ゆへは機法不二の名号なれば。南無阿弥陀仏の外に能帰もなく又所帰もなき故なり。

と述べ、証空の弥陀が衆生を「追ありき給」うを超越して、名号自身に南無と阿弥陀仏の能帰所帰を含んでいと説く。即ち、同巻下四十九には、

南無とは十方衆生なり。六字をしはらく機と法と覺との三に開して。終には三重か一體となるなり。

として、火は薪がなければ滅する如く、機も法も尽きれば、南無阿弥陀仏には能帰の衆生も、所帰の阿弥陀仏もないと説き、機法をたてることは病氣に応じて薬を与える如くであつて、

迷悟機法を絶し自力他力のうせたるを不可思議の名号ともいふなり。

と結んでゐる。かくて、証空は、「略安心鈔」にサレハ我等カ心ヲバ南無トモ云ヒ彼ノ仏ノ我等ヲ撰シ有ヲハ阿弥陀ト云彼此一ニ成合ヒタル姿ヲ即チ仏ニテオハシマス処ヲ南無阿弥陀仏トハ申ナリ。

と説き、枯木に火をつけて、火が木を焼き、その火、木に寄合つて「おき」となれば、何れを火、何れを木とも分けられない。是を機法一体を成ずる信であるとのべて

いる。

之に対し、一遍は「語録」巻下五十に、

南無は始覚の機。阿弥陀仏は本覚の法なり。

しかれば始本不二の南無阿弥陀仏なり。

として、十劫に弥陀は南無阿弥陀仏を以つて名号とし、その体とし、その本願とし、十方衆生を摂したもうのであり、名号は、結局、弥陀の正覚と衆生の往生との相關關係を含むものであると論ずる。

一遍の機法一体の名号觀は「六十萬人頌」の才一句

「六字名号一遍法」でその決着が明かされている。賞山の「神島撮要鈔」には、

一者則是理也性也。遍者即是事也相也。謂一理一切理。

一性一切性。理遍法界故諸法実相。色心事理性相不二也。云々。一遍法者六字名号是萬法總名也。一遍法是

名号所在萬法即事理真俗等也。

とのべる処であり、「十一不二頌」(「語録」巻上)で窺われる十劫正覚の弥陀は衆生の往生によつて、弥陀として完成し、衆生の往生は、亦、彼の正覚によりて成就

される事を更にのべたものである。

(三)

道元は涅槃經の「一切衆生悉有仏性」を、

すなはち悉有は仏性なり。悉有の一悉を衆生といふ。

(「正法眼藏」巻二三仏性)

と解釈している。本来、一切衆生は悉く仏性を有するが故に衆生は可能態に於いて、内在する仏性を一歩々々と何等かの程度に実現しつつ、ついに之を完全に実現すると論ずるのである。

所が道元は悉有は仏性として、衆生と仏性との間の發展的關係を否定している。

一切衆生は有心者みな衆生なり。心は衆生なるがゆゑに。無心者おなじく衆生なるべし。衆生は心なるがゆゑに。しかあれば心みなこれ衆生なり。(同卷二三仏性)

とのべ、更に、(同卷三八、身心学道)にのべる、  
向來はたゞこれ心の一念二念なり。一念二念は一山河大地なり。二山河大地なり。

の立場にたつて、草木国土、日月星辰は心であり、その故に衆生であり悉有は仏性であると説く。

しかあればこの山河大地みな仏性海なり。云々。

山河を見るは仏性を見るなり。(同卷二、三、仏性)

真如仏性のなかにかでか、草木等あらむ。

草木等いかでか真如仏性ならざらむ。(同卷六九、発無上心)

と云つて、個々の自然界の事物を直ちに、真如仏性とみ我々の住む世界に、夫々の特殊相を以つて現われる一切の存在以外に、その体と名づける実体的存在を否定している。

この道元のいう悉有は仏性と論ずる生仏一如は、現実の自己を顧みる時、対象にとらわれている我である。そこを道元は、(「正法眼蔵」卷六即心是仏)に

いまた発心修行菩提涅槃せざるは、即心是仏にあらず。

と云い、また「普勸坐禅儀」に「唯務打坐」の必要性を説くのであり、坐禅は祇管打坐(「正法眼三昧王三昧蔵」卷七二)、ただ打坐という時は打坐のみの世界を勸

める。一遍は、

となふれば仏もわれもなかりけり云々。

と詠つて、名号は有にも無にもあらず、たゞ声に任せてとなえる時に、生死を離れる事ができるとのべている。

道元が意味した悉有仏性は、一遍に於いて今他力不思議の名号は自受用の智なり云々。自受用といふは。水か水のみ火か火を焼かごとく。松は松竹は竹。其體をのれなりに生死なきをいふなり。(「語録」卷下十四)

と告げる処であり、

衆生我執の一念にまよひしより己来既に常没の凡夫(

「語録」卷下十四)

には、ころなきころ、換言すれば、

領解すといふは領解すへき法にはあらずと意得る云々。

(「語録」卷下四七)

一念に名号に帰入する処に、名号が名号を聞く(「語録」卷下七十)世界が開けるのである。

この世界こそ悉有仏性の世界であろう。

四

釈迦一代の聖教の所詮は、たゞ名号であると説く  
（「語録」巻下）一遍にあつては、六字名号は弥陀と衆  
生の二を認めない不二の姿である。

人が仏に念仏するのでなく、仏が人に念仏を求めるの  
でなく、念仏が自ら念仏するのである。

我體を捨て南無阿弥陀仏と独一なるを一心不乱といふ  
なり。されは念々の称名は念仏か念仏を申なり。（

「語録」巻下十六）

と説き、更に、

名号に心をいるとも、ここに名号をいるへからず。

（「語録」巻下二九）

として、衆生の妄執を捨てしめるのである。

熊野の御示現によつて他力本願の深意を領解した一遍

のまえには、

心品のさはくり有へからず。此心はよき時もあしき時  
も迷なる故に。出離の要とはならず。南無阿弥陀仏か

往生するなり。（「語録」巻下八五）

の確信は、また、

領解すといふは領解すへき法にあらず。

とまでに衆生の凡情を捨てしめ、かくて名号に帰入の後  
は、

松は松竹は竹。其體をのれなりに生死なきをいふ。

自受用の境に住するのである。

称える端的は、仏もわれもなく、たゞ南無阿弥陀仏な  
むあみた仏の唯一念仏の世界が存在するのみである。

この称える端的。南無の願心を発さんが為に、

旅衣木の根かやの根いつくにか

身の捨られぬ処あるへき（「語録」巻上）

と、仏によつて行ぜられる他力利他の成三業の念仏行の  
みの愉悦の中に一遍は賦算、踊躍念仏に生涯を送るので  
あつた。

我等は下根のものなれば。一切を捨すは定て臨終に諸

事に著しく往生をし損すへきなどのべて、一切を捨離  
している。「十二不二頌」を得て舍宅田園をすて、恩愛

眷屬をはなれて、衆生を利益しようとして、一所不住の遊行

に出でた一遍は、俗人的家庭生活を営んだが故に、また沙弥教信を慕うのであった。

衣も常に定めなし云々。有に任て身にまとひ云々。命をささふる食物はあたりつきたる其ままに云々。同朋もとめて何かせん。「語録」卷上 百利口語

と告白する一遍は、現実の世界の一切を

おもひと思ふ事はみな、叶はねはこそかなしけれ。

(同)

と否定し孤独の寂靜の中に、称えれば仏も我もなき法悦をかみしめて、賦算に踊躍念仏に、生涯を送つた聖であつた。

以 上

## 称 名 論

加 藤 光 照

自分が将来にかけての希望と誓願をこめて、その正し

い、力強い出発の爲にもと、あえて、称名の問題を選び、その一端でも知りたいところに称名論と題したのである。五濁の世に明日の自分を造る拠とする法然上人の称名觀を指して、その起源及び展開を究明したいと思う。今都合上、特に浄土三部經を中心とし、浄土の各祖師をその対象にして、論を進めることにしたい。

先ず三部經の往生行に於ける称名の成立を考察しなくてはなるまい、この問題を述べるに当つて、その問題の眼目と見られる、無量壽經の四十八願の中、才十八願を中心にして、生因願に於ける往生行が無量壽經異訳經典に如何なる段階をもつて成立し来り、それが三部經を通して、いかなる往生行を生み出し、称名の成立を見たか、歴史的、思想的に論じたいと思う。無量壽經異訳經典の成立は、二十四願經より三十六願經を経て、四十八願經に發展するもので、その最も古いとされている大阿弥陀經には、生因願として才五、才六、才七の三願が見られるが、その往生の因は「作善、分檀布施、齋戒清淨」等の、あくまでも善根を積むことにある。これらの生因願